

平成 30 年 5 月 10 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2014～2017

課題番号：26704001

研究課題名(和文) ブータン仏教の思想、歴史、およびその現状

研究課題名(英文) Thoughts, history and current state of Buddhism in Bhutan

研究代表者

熊谷 誠慈 (Kumagai, Seiji)

京都大学・こころの未来研究センター・特定准教授

研究者番号：80614114

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 18,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、ブータン仏教の思想、歴史、およびその現状について研究を進めた。

1. 文献研究および2. フィールド研究により、ブータン仏教の歴史・思想・現状を総合的に解明した(基礎研究)。その上で、3. 学際研究により、ブータン仏教の社会への応用性についても検討した(応用研究)。  
研究成果については、2冊の英文単編著、1冊の和文単編著、7本の英文・和文雑誌論文、8本のBook Chapter、国内外の学会・研究会発表、HP等を通じて公表した。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we have studied philosophy, history, and current state of Bhutanese Buddhism. We conducted philological and field research on philosophy and history of Bhutanese Buddhism. We also examined how Bhutanese Buddhism has been applied in Bhutanese society.

In order to report my research findings, I published two books in English, one book in Japanese, and 7 papers and 8 book chapters in English and Japanese.

研究分野：仏教学

キーワード：ブータン仏教

## 1. 研究開始当初の背景

国連世界幸福デー(3月20日)の採択や現国王夫妻の訪日(2011年11月)などを契機に、近年、ブータンに対する関心は国内外で大きな高まりを見せている。しかし、既存のブータン研究はこうした世界的な関心の高揚に應えるのに未だ十分な質と発展性を具えていなかった。

従来のブータン研究は大きく歴史研究とGNH (Gross National Happiness: 国民総幸福) 研究との2つに分けられる。歴史分野では、Michel Aris (*Bhutan: the Early History of a Himalayan Kingdom*, Warminster, 1979) や、今枝由郎(『ブータン中世史』, 大東出版社, 2003)などが、ブータン中世史の様相を解明してきた。2000年代になると、王立ブータン研究所が国際GNH学会を定期開催し、経済学、心理学、開発学などを中心にGNH研究が推進されてきた。

しかし、ここで想起すべきはブータンが仏教国であることである。つまり、ブータン文化・社会の基盤たる仏教の理解なくして、同国を真に理解することはできない。ただ残念ながら、同国が長らく鎖国されていたことに加え、広汎なヒマラヤ宗教文化の知識を必要とするため、ブータン仏教に関する学術研究は大幅に遅れていた。したがって、より本質的なブータン研究を推進するために、ブータン仏教の学術的解明は喫緊の課題であった。

当初、ブータン国外の大学機関には専門の研究部局が存在せず、本格的なブータン研究の遂行には、特別な環境整備が必要であった。そこで研究代表者は、2012年1月に王立ブータン研究所と共同で「ブータン仏教研究プロジェクト」を開始、同年4月には京都大学に、世界に先駆けて「ブータン学研究室」を開設した。仏教研究を軸とした総合学際的ブータン研究を目指し、国内外の大学と連携

し、研究会や講演会、国際研究集会を定期開催してきた。

ブータンという国が成立し、かの地で仏教が独自の展開を始めたのは17世紀半ばである。それ以前はあくまでチベットの一地方として、その宗教勢力圏下にあった。したがって、ブータン一国の仏教研究のみでは不十分である。さらに、仏教がインドからチベット経由でブータンに伝わったことも考慮する必要がある。そこで研究代表者は、「インド チベット ブータン」という仏教史の展開に沿って、幅広い視座から、本質的にブータン仏教を理解する必要があるという着想を得た。

2011年以降、ブータンの重要な歴史書および主要な仏教哲学文献の読解を開始し、また、ブータン仏教の現状を把握すべくフィールド調査に着手する一方、GNHなどブータン社会における仏教思想の応用性に関する学際的研究にも参画し、本研究課題の開始に備えた

## 2. 研究の目的

本課題の研究期間中には、研究代表者のそれまでの研究を発展させる形で、1. 文献研究および2. フィールド研究により、ブータン仏教の歴史・思想・現状の総合的解明を目的として基礎研究を進めた。その上で、3. 学際研究により、ブータン仏教の社会への応用性の検証を目的として応用研究を進めた。

## 3. 研究の方法

### 【1. 文献研究】

#### A. 歴史研究：

ブータンでは、国教たる“ドゥク派”と大衆的な“ニンマ派”の2宗派が有力である。ブータンの歴史書は、ドゥク派中心の

歴史観を提示するので、中立的かつ客観的な歴史観は得難い。そこで申請者は、サキャ派やゲルク派など少数宗派の予備調査を進めた。

また、テンジンチューゲル(1701-1767)著 *Lho'i chos 'byung* 等の歴史書を吟味し、ブータン国内の宗派間の結びつき、さらにはチベットとの関係も含めた有機的なブータン仏教史の構造解明に取り組んだ。

### **B. 思想研究：**

ドゥク派は開祖 ツアンパギャレー(1161-1211)、パジョ・ドゥゴムシクポ(1184-1251)や、ガワンナムゲル(1594-1651)、ニンマ派はペマリンパ(1450-1521)や、ペマティンレ(1564-1642)など、ブータン仏教の基礎を築いた重要人物の思想を整理するとともに、彼らの主著の校訂テキストおよび試訳の作成に取り組んだ。

### **【2. フィールド研究】**

本課題では、サキャ派やゲルク派など、少数宗派の歴史と現状を解明すべく予備調査を行った。また、多数派のドゥク派のチベットにおける現状についても予備調査を行った。以上、ブータンとチベット文化圏を実地調査し、地域ごとの宗派の歴史とその現況について、多角的に研究を進めた。

### **【3. 学際研究】**

本課題では、GNH 政策に应用されている仏教思想に関する論考を公表した。さらに、今後はさらに環境政策なども含む諸政策の理念や内容に窺われる仏教的要素を抽出するとともに、ブータンの社会および地域文化における仏教の影響を吟味し、日本をはじめとする仏教圏の実状との比較を行った上で、現実社会に対する仏教思想の応用可能性について検討した。

## **4. 研究成果**

### **【1. 文献研究(歴史・思想)】**

ブータン仏教のうち“ドゥク派”と“ニンマ派”という2大宗派の歴史についてはすでに多くの研究がなされてきた。一方で、その思想については多くの部分が未解明である。とりわけ、ドゥク派の開祖ツアンパ・ギャレー(1161-1211)については、テキストへのアクセスが長らく困難であったこともあり、その思想の大部分が未解明のままであった。

1年次(平成26年度)には、ツアンパ・ギャレーの入手可能な全著作のテキスト入力を完成し、校訂テキストならびに試訳の作成を開始した。

2年次(平成27年度)には、ツアンパ・ギャレーの校訂テキストならびに試訳の作成を進め、思想概要の回収に努めた。

3年次(平成28年度)には、ツアンパ・ギャレーの伝記入手可能な7種類の伝記の写本を全てを入手し、テキスト入力が行った。

4年次(平成29年度)には、4年次(平成29年度)には、ツアンパ・ギャレーの伝記入手可能な7種類の伝記の写本を全て入手し、批判的校訂作業を進めるとともに、試訳の叩き台を完成させた(但し修正すべき箇所は多く残っている)。同時に内容分析を進め、伝記研究の成果を論文を通じて発表した。

### **【2. フィールド研究】**

1年次(平成26年度)には、サキャ派やゲルク派など、ブータン仏教の少数宗派の現状についてフィールド予備調査を行った。結果、ブータンのサキャ派は1959年頃に消滅したことが判明し、研究成果を論文として公表した。また、ブータンのゲルク派は、インド・アルナチャルプラデーシュ州のタワン県・西カメン県に広がるゲルク派と強

い関係性を持つことが分かった。

2年次(平成27年度)には、ブータンにおけるサキャ派の予備調査を継続し、第4回国際若手チベット学会にて、調査報告を行った。

3年次(平成28年度)には、ドゥク派のチベットにおける現状について、翌年度に行う予備フィールド調査の準備として、二次文献を通じて情報収集を進めた。

4年次(平成29年度)には、中央チベットのウ地方、ツァン地方を訪問し、ドゥク派のチベットにおける現状について調査を行い、第2回国際密教サミットにて調査報告を行った。

### 【3. 学際研究】

ブータンの国民総幸福(GNH)政策は世界的に有名であるが、同政策についてはこれまで主として開発学や経済学的視点から研究が進められてきた。

1年次(平成26年度)には、同政策の基底にみられる仏教思想について検証を行い、文化・社会に見られる仏教思想の応用性を検証し、論文として公表した。

2年次(平成27年度)には、同政策の基底にみられる仏教思想について更なる検証を行い、第6回国際GNH学会にて口頭発表を行った。

3年次(平成28年度)には、GNHの日本での応用事例について検討をした。具体的には、東京都荒川区のGAH(荒川区民総幸福度)を調査するとともに、自治体連合「幸せリーグ」との関係性を構築した。

4年次(平成29年度)には、4年間の集約の総まとめとして、ブータンのGNHの歴史概要と、日本における応用・展開について再整理した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

熊谷誠慈:「ブータンにおける仏教と国民総幸福(GNH)」, 『宗教研究』, Vol. 380, pp. 25-52, 2014年。(単著)

Seiji Kumagai: “Bonpo Abhidharma Theory of Five Aggregates,” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. 64-3, pp. 150-157, 2016。(単著)

熊谷誠慈:「『こころ』の文献学的研究の総括および展望」, 『こころの未来』 Vol. 15, pp. 44-47, 2016年。(単著)

Seiji Kumagai: “The Bonpo Abhidharma Theory of Perception (*Samjñā*),” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. 65-3, pp. 1185-1192, 2017。(単著)

熊谷誠慈:「北伝仏教における想蘊区分についての一考察～二想、三想、四想～」, 『印度学仏教学研究』 Vol. 66-2, pp. 91-97, 2018年。(単著)

西田愛、今枝由郎、熊谷誠慈:「中央ブータンの守護尊・ケーブ・ルンツェンの法要儀軌(翻訳編)」, 『ヒマラヤ学誌』, Vol. 19, pp. 49-58, 2018年。(共著)

熊谷誠慈:「ブータンの歴史、および日本との交流史」, 『ヒマラヤ学誌』, Vol. 19, pp. 3-5, 2018年。(単著)

〔学会発表〕(計10件)

Seiji Kumagai: “Bonpo’s Absorption and Development of the Buddhist Theory: with a Focus on Abhidharma Theory,” *17<sup>th</sup> International Conference of the International Association for Buddhist Studies*, Wien: University of Wien. (2014)

年 8 月 22 日)

Seiji Kumagai: “How did the Mādhyamika Tradition Universalize the Concept of Emptiness?” *Bouddhisme et universalisme, Colloque international à Kyōto*, Kyoto: Kyoto University. (2014 年 10 月 4 日)

Seiji Kumagai: “History and Current State of Sakya School in Northern Bhutan,” *4<sup>th</sup> International Seminar for Young Tibetologists*, Leipzig: University of Leipzig. (2015 年 9 月 8 日)

熊谷誠慈: 「ボン教アビダルマに影響を与えるインド仏教思想：五蘊説を中心に」, 日本印度学仏教学会, Vol. 66, 和歌山：高野山大学. (2015 年 9 月 19 日)

Seiji Kumagai: “Buddhist Psychology for Happiness and Wellbeing,” *6<sup>th</sup> International Conference on Gross National Happiness*, Paro: Ugyen Pelri Palace. (2015 年 11 月 6 日)

Seiji Kumagai: “A Study through Biography and Chroncles on Tsangpa Gyare (1161-1211): the Founder of the Drukpa Kagyu School,” *14<sup>th</sup> Seminer of the International Association for Tibetan Studies*, Bergen: University of Bergen. (2016 年 6 月 22 日)

熊谷誠慈: 「ボン教における「想蘊」の概念：ボン教アビダルマに影響を与えるインド仏教思想」, 日本印度学仏教学会, Vol. 67, 東京：東京大学. (2016 年 9 月 3 日)

熊谷誠慈: 「ブータン仏教とそのルー

ツ：ドゥク派開祖ツァンパギャレー (1161-1211)を中心に」, 日本ブータン学会, Vol. 1, 東京：早稲田大学. (2017 年 5 月 21 日)

熊谷誠慈: 「「想蘊」の区分～二想、三想、四想～」, 日本印度学仏教学会, Vol. 68, 東京：東京大学. (2017 年 9 月 3 日)

Seiji Kumagai: “A Report on Some Physical Evidences Related to Tsangpa Gyare (1161-1211) Found in Ralung Monastery and Druk Monastery in Tibet,” *2<sup>nd</sup> Vajrayana Summit*, Thimphu: Centre for Bhutan Studies. (2018 年 3 月 28 日)

[ 図書 ] ( 計 3 件 )

Seiji Kumagai: *Bhutanese Buddhism and Its Culture*, Kathmandu: Vajra Publications, 2014. ( 単編著 )

熊谷誠慈『ブータン：幸せをめざす王国』, 大阪：創元社, 2017 年. ( 単編著 )

Seiji Kumagai: *Buddhism, Culture and Society in Bhutan*, Kathmandu: Vajra Publications, 2018. ( 単編著 )

[ Book Chapter ] ( 計 8 件 )

Seiji kumagai: “History and Current Situation of the Sa skya pa school in Bhutan,” *Bhutanese Buddhism and Its Culture*, Kathmandu: Vajra Publications, pp. 127-139, 2014 年. ( 単著 )

熊谷誠慈: 「『心』と『ころ』：文献学的手法に基づくころ学の構築」, 『ころ学への挑戦』, pp. 101-128, 2016 年. ( 単著 )

熊谷誠慈：「インドからチベットへの中  
観派の展開」, 『チベット仏教』, 東京：  
サンガ, pp. 96-109, 2016年。(単著)

熊谷誠慈：「ボン教の歴史的概要」, 『仏  
教史研究ハンドブック』, 京都：法蔵館,  
pp. 46-47, 2017年。(単著)

熊谷誠慈：「資本主義の先に何を指す  
べきか？ポスト資本主義」, 『2100年へ  
のパラダイム・シフト』, 東京：作品社,  
pp. 95-98, 2017年。(単著)

熊谷誠慈：「ブータンの歩みをたどる」,  
『ブータン：国民幸せをめざす王国』,  
大阪：創元社, pp. 12-30, 2017年。(単著)

Seiji Kumagai “Introduction to the  
Biographies of Tsangpa Gyare (1161-1211),  
Founder of the Drukpa Kagyu School,”  
*Buddhism, Culture and Society in Bhutan*,  
Kathmandu: Vajra Publications, pp. 9-34,  
2018. (単著)

熊谷誠慈：「ドゥク派開祖ツァンパギャ  
レー(1161-1211)の伝記研究～ブータン  
仏教のルーツ～」, 『チベット・ヒマラ  
ヤ文明の歴史的展開』, pp. 279-309, 2018  
年。(単著)

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

熊谷 誠慈 (KUMAGAI SEIJI)

京都大学・こころの未来研究センター・  
特定准教授

研究者番号：80614114